

上今井遊水地整備事業に伴う発掘調査

みなみ おお はら

きた おお はら

南大原遺跡 北大原地区 現地公開 資料

令和7(2025)年7月16日(水)・7月17日(木)
(一財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター



北大原地区遠景(北西から)

■ : 今回ご覧いただく調査区

《遺跡の概要》

南大原遺跡は、曲流する旧千曲川左岸の自然堤防及び後背湿地上に立地します(千曲川は明治3~5(1870~1872)年に瀬替えされ、現在の位置に流れを変えています)。昭和25(1950)年の神田五六氏らにより、縄文時代前期後半の^{たてあな}竪穴建物跡の一部が発掘調査されました。出土した土器は後に「南大原式土器」として位置付けられました。その後、県道三水中野線の改良工事に伴って、旧豊田村教育委員会や当センターが発掘調査し、弥生時代中期後半を主とする遺跡であることも明らかになりました。

現在は、上今井遊水地整備事業に伴い、当センターが令和5(2023)年度から発掘調査を実施し、古地図に記載されていた近世の水田跡や奈良時代の掘立柱建物跡などの遺構を確認しました。令和6(2024)年度の調査では、弥生時代の竪穴建物跡のほか、これまで空白の時代だった平安時代に属する竪穴建物跡もみつき、縄文時代から近世に至るまで、人々の生活の痕跡が南大原遺跡一帯に記されていることが明らかとなりました。

《北大原地区の概要》

昨年度の確認調査の結果、鍋久保^{なべくぼ}地籍と北大原地籍の境界となる崖状の地形は、旧千曲川の流路によって削られた崖面であり、高台となる北大原地区は河岸段丘の上にあたる^{ぶたい}ことがわかってきました。今回、現地公開する市道北大原幹線と市道舞台線に挟まれた調査地は、その河岸段丘の縁にあたり、昨年度の調査で古代の竪穴建物跡が数軒分布していることが確認されました。また、舞台地籍でも古代の竪穴建物跡が確認されており、市道舞台線の位置が、鍋久保地籍と北大原地籍の境界となる崖から続く河岸段丘状の縁に相当すると考えられます。古代の人々は、こうした河川に面した高台を居住地として選んでいたとみられます。

一方、旧千曲川に面した北大原地区では、昨年度の調査で弥生時代や古代の竪穴建物跡がみつかり、南大原地籍と同様な状況がつかめています。この地区の発掘調査は来年度以降となります。乞うご期待です。

《発見された遺構群》

今回の調査で時代の明らかとなった遺構は、平安時代に限られます。現在までに把握した平安時代の遺構は以下の通りです。

竪穴建物跡：7軒

掘立柱建物跡：1棟

その他、縄文時代の土器や石斧^{せきふ}・石錘^{せきすい}等も出土しています。土器は縄文時代前期約4500年前のものです。

《平安時代の北大原地区》

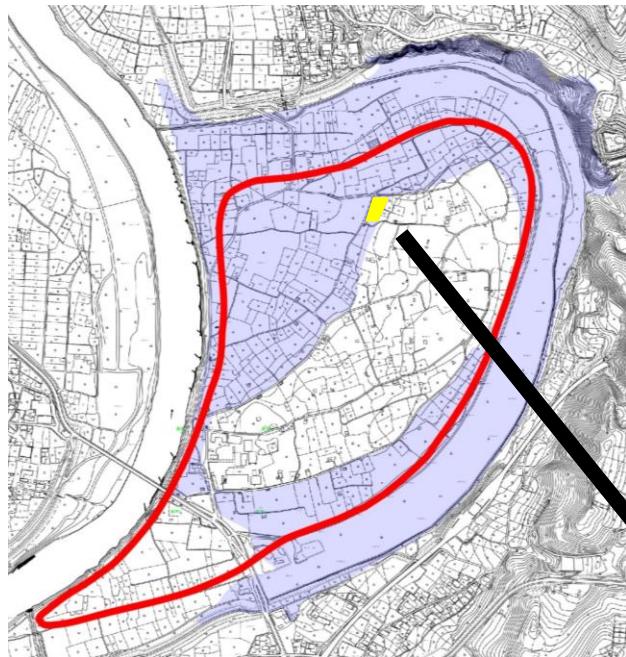
当時の北大原地区は、調査地の北側の農道に沿うよう、尾根状にわずかに高まっています。この高まりの上で、竪穴建物跡と掘立柱建物跡がみつかり、ここより南側は、わずかに低くなっており、建物跡は、みつかりません。

竪穴建物跡は東側で4軒、その西側では掘立柱建物跡を挟んで3軒が確認されています。西側の3軒は建物の一部がそれぞれ重なった状態でみつかり、この3軒の建物は同時に建てられていたのではなく、建物の取り壊し→埋め戻し→少し位置を変えての建て直し、が2回繰り返された結果です。

竪穴建物跡の特徴としては、どの建物にもカマドがあり、各建物の南東側に設けられていることが挙げられます。そして、各建物のカマドは意識的に壊された状態でみつかり、おそらく「家じまい」に伴う行為としてカマドが壊され、カマド内に坏等の食器が供えられたのではないかと考えられます。

調査は今後西側の地区(舞台東地区)へと進めていく予定です。その過程で、新たに竪穴建物跡がみつかることが予想されます。それとともに、当時のムラの様子が復元されていくものと期待されます。





-  南大原遺跡の範囲
-  上今井遊水地整備事業の範囲



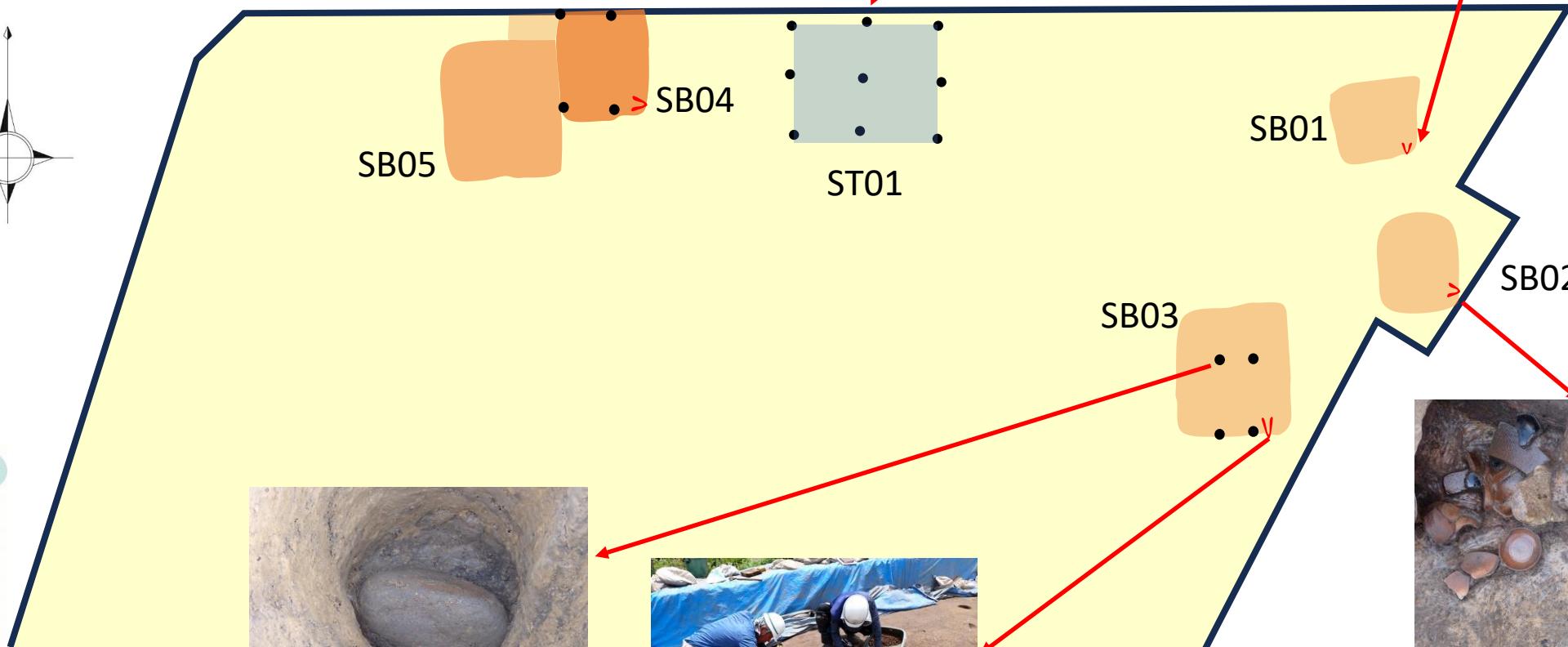
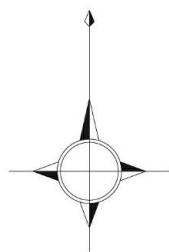
カマドは当時の状態のまま残っているように見えたが、実際には壊されていました。中には、坏等の土器が置かれていました。



2間×2間の総柱建物です。



カマドは完全に壊されていました。よく焼けた火床だけが残り、その上に壺が置かれていました。



柱穴の底には、柱が沈み込まないように20cm大の石が置かれていました。



実際に使われていたカマドの横に、石組みのカマドが復元され、中には坏等の食器が置かれていました。



カマドが壊されると同時に、右横の貯蔵穴が埋められていました。その際、カマドに使われていた石材の一部が、貯蔵穴の上に置かれたようです。